

外部評価(事業仕分け)結果にかかる市の対応方針

事業番号	2	事務事業名	緑化推進事業	担当課	都市計画課
評価結果	再検討		市の対応方針	改善	
外部評価 (事業仕分け)時の意見、要望など	<p>【外部評価(事業仕分け)における議論時の意見、要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直営に近い事業。委員会は形式上だけ。どうやるかと誰がやるかということに合わせて考える必要がある。30年前の開始当初から世の中や市役所の役割も変わり、市民協働という言葉も言われるようになり、誰がやるかという役割について、委員会がやるにしても行政と市民の間でどうやってやるかが議論されるべき ・目的が抽象的で、何をいつまでどこまでやるのか分からない。「花いっぱい」のゾーニング(※区分を決めること)が必要。まち全体は有り得ず、事業目標は対象が何㎡で常に花がある、博物館の周りは常に綺麗にする等を書くことができる。対象を絞らなければきりが無い ・綺麗になった、観光客が来た等のインセンティブで地元根付かせることが重要。最終目標は自発的に花を植えよう、綺麗にしようという市民を増やすこと。アダプト制度(※企業や住民が公共スペースを養子[=アダプト]のように愛情をもって清掃美化する制度)が必要。エンドレス事業ではダメ ・実際のところ市が実施主体と受け取れる。行政と住民がやる範囲、どこまでやるか、行政の意識を変えないといつまで経ってもやる、そういう視察でないと意味がないが、資料には視察の記載がない ・募金寄付者に繰越金の説明ができていないか。200万円も貯金があるが、何に使うか分からないお金を実体の無い団体が使う計画も無いままに持っていることは問題 ・補助金があるうちはやるけど、無くなったらやらないということでは意味が無い。どうやって個人的に自分のお金を出して綺麗にしていくという意識を育てることが求められている ・開始から30年も経過して今のままでいくことは問題。事業自体がほぼ必要ないという状態を目ざして市民が自発的にやっていくかを焦点にしてほしい ・この機会に観光客を増やすための方策をもう少し考えてほしい ・花がまちの中のどこにあるのか、実際は無い。イチョウの木がギンナンを落としているが、それを綺麗にすることも意味がある。大任町の桜街道も参考にしてほしい 				
	<p>【評価シート記載コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マンネリ化は否定できず、補助団体の活動も補助金ありきからするとゼロベースで見直しが必要。 ・どこまで、いつまで、誰が、何をやるのか全く説明できないエンドレス事業になってしまう。 ・民の行う範囲を広げる方向で行うべきである。企業貢献やアダプトを導入すべき。 ・団体の繰越金の扱いが無責任。実体の無い団体に留保させることが問題。よって、このようなずさんな事業を行っていくことをすぐにやめ、見直すべき。 ・補助金はきっかけに過ぎない。行政が手を放し、民間や個人が花を育てることが大切であるとする風土を作っていくことが大切。 ・必要額の算定根拠が見えない。方針の明確化及び透明性を。委員会の実質的な活動実態が無い自覚があるならば、ゼロベースで見直しを。「参加者意識」だけでは弱い。 ・目標が不明。必要性をもっと明確にする。どこまで、誰がやる、どうしたい…がない！市民のフィードバックは！ ・民間合同の強化を推進してはいいのでは？具体的には官→民へ。改めて計画を！ ・そもそも苗を配って何をどうしたいのか。田川市を見てどこに花があるのか？他の町も見てもらいたい。 				
行政改革推進本部 決定内容	<p>【事業の手法について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緑化事業の実施場所が点在し、成果が目に見えない。市外からの来訪者に重点を置き、早期に緑化計画を策定した上で、目線を定めた特色のある事業を行う。 ・緑化事業のPRを積極的に行う。 ・市民への緑化啓発の推進策として、緑化事業に貢献した個人及び団体に対して表彰を行うことを検討する。 				
	<p>【翌年度予算について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・翌年度の予算については、限度額として今年度並みの予算措置を行う。まずは、緑化計画を策定し、計画に基づいたメリハリのある事業に変えた上で、予算を執行する。 <p>【その他】</p>				